

南丹地域振興計画

(中間案)

令和元年6月

南丹広域振興局

<目 次>

1	計画の特徴	・・・・・・・・・・1
2	地域の将来像（20年後に実現したい姿）	・・・・・・・・・・3
	（1）地域特性	・・・・・・・・・・3
	（2）目指すべき将来像	・・・・・・・・・・4
3	施策の基本方向（4年間の対応方向）	・・・・・・・・・・5
	＜具体的施策（今後取り組む各分野の方策）＞	
	（1）森の京都・京都丹波の地域資源を活かした交流・活力のまちづくり	・・・・・・・・・・6
	ア 豊かな自然・歴史文化や食、木材など「京都丹波」ブランドのさらなる魅力発信	
	イ 京都スタジアムを核にしたスポーツの振興・まちの賑わいづくり	
	（2）人権が尊重され、希望を持って元気に活躍できる地域づくり	・・・・・・・・・・11
	ア 女性や高齢者、障害者等誰もが活躍できる地域づくり	
	イ スポーツ資源等を活かした健康長寿の地域づくり	
	（3）明日の京都丹波産業を担う人づくり	・・・・・・・・・・16
	ア 特色ある高等教育機関の集積や立地条件を活かした商工業振興	
	イ 京都丹波ブランドを支える特産農産物等の生産拡大・品質向上	
	ウ 地元企業や関係団体等と連携・協働した人材育成・確保	
	（4）オール京都丹波による移住・定住プロジェクトの推進	・・・・・・・・・・19
	ア 住まい、仕事、子育てがしやすい「森の京都・京都丹波ライフスタイル」の発信	
	（5）交流と安心・安全の基盤づくり	・・・・・・・・・・22
	ア 京都縦貫自動車道からのアクセス道路の整備促進	
	イ 桂川等河川整備など災害対策の推進	
	ウ 暮らしの安心まちづくりの推進	
4	京都丹波の強みを活かす「横断プロジェクト」	・・・・・・・・・・28
	（1）京都丹波『食』プロジェクト	
	（2）京都丹波『自然・歴史文化』プロジェクト	
	（3）京都丹波『スポーツ』プロジェクト	
5	エリア構想	・・・・・・・・・・34
	京都スタジアムを中核とするスポーツ&ウェルネス構想	
6	数値目標の候補	・・・・・・・・・・35

1 計画の特徴

■「京都丹波」を、地域を象徴するブランドとして掲げた計画です。

- この地域のすばらしさを地域の内外に伝えるためには、地域の一体性を高め、地域全体の力を結集することが大切です。このため、2011年1月に策定しました「明日の京都丹波ビジョン」（南丹地域振興計画）で、共通の言葉として、「京都丹波」という新しい言葉を使用し、「京都丹波ブランド」を確立して発信していこうという目標を掲げ、これまでその浸透と発信に取り組んできました。
- 「京都丹波」は、京都府と兵庫県にまたがる旧丹波国のうち、南丹管内の2市1町のエリアを指しています。「京都丹波」という名称には、『京都』と『丹波』の双方が持つ歴史や伝統文化、美しい自然や豊かな農林畜産物等の豊富な地域資源を活かして、活力と魅力にあふれ、次世代を担う若者が夢と誇りを持てる地域づくりを進めたい、という強い思いが込められています。
- 最近では、「京都丹波」の名称が地域やイベント名、広報誌等で自然に使われる等、一定浸透してきましたが、全国的にはまだまだ認知度が低く、京都丹波ブランドとして定番化した特産品も少ないのが現状です。今後、さらに名称の浸透と「京都丹波」ブランドの魅力発信を進め、多くの人をこの地域に呼び込み、賑わいづくりに努めていきたいと考えています。

■京都丹波の強みを活かす「プロジェクト」を設定し、オール京都丹波で施策を横断的に推進していく計画です。

- 京都丹波地域には、質の良い「食」、豊かな「自然・歴史文化」、自然や地形を活かした「スポーツ」など、キラリと光る地域資源があり、それがこの地域の強みとなっています。これら3つの強みは、いろいろな分野と関わっています。
- 今回の計画では、各行政分野ごとに記載している具体的施策に、「食」、「自然・歴史文化」、「スポーツ」という京都丹波の強みという視点から横串を入れ、地域課題を解決する新たな取組等が生まれそうな施策を集めて、「3つの横断プロジェクト」を設定しました。
- このプロジェクトでは、様々な分野の識者やNPO等地域活動団体に集まっていただき、オール京都丹波で議論・検討して取り組み、より効果的で広がりのある施策を展開したいと考えています。

これまでの行政分野ごとの施策に、京都丹波の強みという視点を取り入れて組み立ててみることで、思わぬ化学反応が起こり、これまでにない発想で画期的な取組が生まれることを期待しつつ、地域の活性化や交流拡大を目指します。

<横断プロジェクトの概要>

➤ 京都丹波『食』プロジェクト

京都丹波は、京の都を支えてきた食材の宝庫であり、ブランド京野菜や畜産物は府内生産額の約4割を占める地域です。本プロジェクトでは、「食」を切り口に施策の広がりや相乗効果が生まれる様々な取組を展開します。

- ・ 食の体験や農作業を取り入れた田舎暮らし体験ツアーによる「移住促進」
- ・ 捕獲した有害鳥獣の処理施設の整備による「新たな商品開発（ジビエ）」
- ・ 地域内のイベントや観光コースに食を取り込み魅力を高めて「誘客促進」
- ・ 障害者の社会参画促進と農業の人手不足を解消する「農福連携」
- ・ 学校給食に地元産食材を導入することによる「地産地消」や「食育推進」

➤ 京都丹波『自然・歴史文化』プロジェクト

京都丹波は、森林面積が82%を超える自然豊かな地域であり、伝統ある郷土文化や芸能、祭り、文化財等を数多く受け継いでいる地域です。本プロジェクトでは、「自然・歴史文化」を切り口に施策の広がりや相乗効果が生まれる様々な取組を展開します。

- ・ 森の京都の豊かな自然・歴史文化を取り入れたウォーキングコースの普及による「健康増進」
- ・ 広大な自然環境や特色ある大学の立地を活かした「先端技術の開発」や「地元産業育成」
- ・ 森の京都を学ぶ講座の開催や地域学芸員・語り部の養成による「郷土愛の醸成」

➤ 京都丹波『スポーツ』プロジェクト

2020年には「京都スタジアム」がオープンします。また、京都丹波は、自然の地形を活かしたアウトドアスポーツが盛んで、全国規模のトライアスロン大会が毎年開催されているほか、2021年のワールドマスターズゲームズでは、管内の全ての市町が競技会場となるなど、多くの集客が見込まれます。本プロジェクトでは、「スポーツ」を切り口に施策の広がりや相乗効果が生まれる様々な取組を展開します。

- ・ 京都スタジアムや京都トレーニングセンターにおけるスポーツ体験等を通じた「“京都丹波ファン”」の拡大
- ・ 京都スタジアムをゲートウェイとした京都丹波地域の「周遊・滞在型観光」の推進
- ・ 京都トレーニングセンターと大学等との連携によるトップアスリートの発掘・育成と、全ての年齢層が気軽に参加できるスポーツ体験を通じた「体力づくり・健康づくり」

2 地域の将来像（20年後に実現したい姿）

（1）地域特性

○京都スタジアムなど交流拠点の整備が進展

近年、京都縦貫自動車道の全線開通をはじめ、京都トレーニングセンターや京都丹波高原国定公園ビジターセンターなど大規模な交流基盤の整備が進んでおり、2020年には京都スタジアムがオープンします。

○京都先端科学大学など高等教育機関が集積、企業立地も進展

環境やものづくり、建築、医療等様々な専門分野にわたり特色ある大学や大学校、専門学校が集積しており、また、京阪神地域等へのアクセスの良さを背景に、高い技術力を有する多種多様なものづくり企業の立地も順調に進展しています。

○ブランド京野菜など特色ある農産物や、林・畜産物の高いシェアを誇る地域

京都丹波は、古くから京の台所を支えてきた食の宝庫であり、府内のブランド京野菜や畜産物の約4割を生産しています。

○大都市に近接していながら豊かな森や田園風景に恵まれた自然環境

京都丹波は、大都市に近接し、京都市内への通勤通学者も多く、高い利便性を有しながらも、自然豊かな「森の京都」の魅力が詰まった地域です。

○Iターンを中心に近年移住者が増加

JR山陰本線（嵯峨野線）や京都縦貫自動車道等の道路交通網の整備に伴う利便性の向上や企業立地の進展により、移住者が増加しています。

○京都府の中央に位置し、府南部と北部の結節点であり、府中部と大阪、兵庫を結ぶ交通の要衝

京都縦貫自動車道をはじめとした交通ネットワークの整備が進められており、悠久の昔から、京都の交通の要衝、京阪神地域とを結ぶ結節点としての役割を担ってきた地域です。

○近年台風や豪雨等による自然災害が多発

2017年の台風21号、2018年の7月豪雨、台風21号など近年自然災害が多発する中、住民の防災意識が高い地域です。

(2) 目指すべき将来像

京都丹波地域においては、次のとおり20年後に実現したい姿を考えています。

～来てよし・観てよし・住んでよし 関係人口等 1,000 万人の活気あふれる京都丹波～

○京都スタジアムを核に定住、交流人口も含めた関係人口等が拡大し、賑わいが創出されている地域

地域の美しい自然や伝統文化を活かした京都丹波ブランドをブラッシュアップし、国内のみならず世界に発信・浸透させることにより、常に管外から多くの人を訪れる、『来てよし』の京都丹波を目指します。

また、京都スタジアムが、スポーツ振興の観点からだけでなく、府中北部と京都市・南部地域を結ぶゲートウェイとなり、また、アクセス道路の整備が進むことにより、この地域を訪れる多くの人々が周遊・滞在し、定住、交流人口も含めた関係人口等が 1,000 万人を超え、賑わいと活気あふれる、『観てよし』の京都丹波づくりを進めていきます。

○食、自然・歴史文化、スポーツなど京都丹波の強みを活かして、誰もが健康で生き生きと、安心・安全に暮らしている地域

京都丹波地域の豊かな食、美しい自然環境、京都スタジアムや京都トレーニングセンター等のスポーツ資源を活用して、地域住民の生涯にわたる健康づくりを推進するとともに、女性や高齢者、障害者等誰もが能力を活かして活躍できる京都丹波づくりを進めます。

また、河川改修等を計画的に進め、リスクを軽減するとともに、地域団体等と協働して、住民一人ひとりの防災意識を高めることにより、安心・安全な『住んでよし』の京都丹波づくりを進めていきます。

○「森の京都・京都丹波ライフスタイル」が浸透し、若者の定着が進んでいる地域

都会に近いこの地域の特徴を活かし、企業の立地を進めるとともに、農林畜産業の収益性の向上や製品のブランド化を図り、産業の活力を産み出す京都丹波を目指します。

併せて、地域全体で子育てに取り組む「子育て文化」が浸透した京都丹波を目指します。

仕事や子育ての環境整備を図り、移住・定住を促進するとともに、豊かな食や自然・歴史文化、スポーツを活かしたライフスタイルの浸透を図ることにより、若者を中心に、京都丹波で生まれ育った人も、新たに移り住んできた人も、誰もがずっと住み続けたいと思える『住んでよし』の京都丹波づくりを進めていきます。

3 施策の基本方向（4年間の対応方向）

京都丹波地域では、「20年後に実現したい姿」に向け、次のことを基本的な視点として取り組んでいきます。

【施策推進の基本的な視点】

○京都丹波の強みである「食」、「自然・歴史文化」、「スポーツ」を活かし、オール京都丹波で地域活性化・交流拡大を推進

豊かな自然、良質の食材や農林畜産物、伝統ある文化、自然を活かしたアウトドアスポーツ等、京都丹波が持つ強みを活かすことを常に意識しながら、あらゆる主体と連携して、オール京都丹波で施策展開を図ります。

○人権が尊重され、誰もがその能力を活かして活躍できる安心の共生社会を構築

一人ひとりがお互いに相手の立場を理解し、思いやる心を持つとともに、人権が尊重され、女性や高齢者、障害者等をはじめ、誰もがその能力を活かし、生涯を通じて元気で活躍できる「共生の京都丹波」を構築します。

(1) 森の京都・京都丹波の地域資源を活かした交流・活力のまちづくり

<基本的な考え方>

- 京都丹波地域には、豊かな里山などの自然環境・景観、郷土文化や伝統的な建造物、芸能、祭りなどの文化財、優れた食材や農林畜産物等のキラリと光る地域資源が豊富にあります。また、京都縦貫自動車道の全線開通や京都丹波高原国定公園の指定、2020年にオープン予定の京都スタジアム等、地域の活性化を支え、交流を促す基盤が整いつつあります。
- さらに、2020年開催の東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では亀岡市と京丹波町がホストタウンに、2021年開催のワールドマスターズゲームズ2021関西では管内2市1町が会場となっています。また、2020年にはこの地にゆかりのある明智光秀が主人公のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」が放送されるなど、さらなる誘客が見込まれています。
- 豊かな地域資源の保存・継承に取り組みつつ、新たに整備された交流基盤やビッグイベントも活用しながら、森の京都DMOとの連携のもと、京都丹波ブランドを国内外に広く浸透させて、管外から人を呼び込み、来訪者を周遊・滞在型観光につなげ、地域の賑わいづくりに結び付く施策を積極的に展開します。

<現 状>

《観光入込客数・観光消費額》

○管内への観光入込客数は概ね順調に増加しているが、一人当たり観光消費額は、1,600円程度と停滞

- ・観光入込客数：2013年 599万人 ⇒ 2017年 820万人（約1.4倍に増加）
- ・観光消費額：2013年 1,684円 ⇒ 2017年 1,646円（ほぼ横ばい）

《豊かな地域資源》

○名所・旧跡、景観

- ・国定公園：京都丹波高原
- ・日本風景街道：美山かやぶき由良里街道、西の鯖街道
- ・京都府景観資産：まほろば・亀岡かわひがし、琴滝 他

○歴史的・文化的な資産

- ・亀岡市：「亀岡祭山鉾行事」、「佐伯灯笼人形浄瑠璃」
- ・南丹市：「田原の御田」、「田歌の神楽」
- ・京丹波町：「和知人形浄瑠璃」、「丹波八坂太鼓」 他

《食》

○米、豆、野菜、畜産を中心とした府内有数の産地（2017年度）

- ・「丹波産キヌヒカリ」：3年連続「特A」を獲得
- ・「ブランド京野菜」の出荷額：府全体の約42%（3億4千万円）
- ・黒大豆、大納言小豆等の生産額：府全体の約40%（2億4千万円）
- ・畜産の生産額：府全体の約36%（54億2千万円）
- ・農産物直売所の販売金額：2011年度14.4億円 ⇒ 2017年度23.6億円（約1.6倍に増加）

《木材》

○京都丹波の森林面積は広く府内で最も林業の盛んな地域だが、近年生産活動は低迷

- ・管内総面積に占める森林面積の割合：82.6%
- ・府全域の森林面積に占める管内森林面積の割合：27.6%
- ・年間木材生産量：2013年：79千³m/年 ⇒ 2017年の59千³m/年（4分の3に減少）

《大規模な交流基盤施設》

○高速道路網の充実によりアクセスが飛躍的に向上し、スポーツや観光振興に資する広域の集客施設が整備

- ・京都縦貫自動車道：2015年全線開通
- ・京都トレーニングセンター：2016年オープン
- ・京都丹波高原国定公園ビジターセンター：2018年オープン
- ・京都スタジアム：2020年オープン予定

《スポーツ》

○豊かな自然環境を活かした様々なアウトドアスポーツ

- ・パラグライダー、ラフティング、ツリークライミング、カヌー、トレッキング 他

○地形を活かした全国規模のスポーツ大会

- ・京都亀岡ハーフマラソン大会（亀岡市）
- ・京都丹波トライアスロン大会、美山サイクルロードレース（南丹市）
- ・京都丹波ロードレース大会、全京都車いす駅伝競走大会（京丹波町）

○大規模な国際スポーツ大会

- ・東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウン
亀岡市（オーストリア・空手競技）、京丹波町（ニュージーランド・ホッケー競技）
- ・ワールドマスターズゲームズ2021 関西の競技会場
正式競技：南丹市（デュアスロン）、京丹波町（ゲートボール）
オープン競技：亀岡市（スポーツクライミング）
海外も含め多くの参加者が来訪見込み（開催期間17日間、大会目標参加者数5万人）

ア 豊かな自然・歴史文化や食、木材など「京都丹波」ブランドのさらなる魅力発信

①「京都丹波」ブランドを全面に出したイメージ戦略を推進します

- 1 あらゆる場面で「京都丹波」の名称が自然に使用されるよう取り組むとともに、あらゆるイベント名や広報物等に「京都丹波」を冠するなど、京都丹波の地域ブランドをより一層普及・浸透させ、国内はもとより世界に向けて「京都丹波」を発信します。
- 2 京都丹波産の食材や木材等を使った料理や製品を積極的に提供する店舗や、京都丹波の農林業・自然・文化を体験できる施設やツアー等の登録制度を新たに創設するとともに、ブランド統一マークを制定し、地域総ぐるみで「京都丹波ブランド」を発信します。

②「森の京都」の豊かな地域資源を活かした賑わいづくりを推進します

- 3 大都市部の子ども達と保護者の方に、京都丹波の魅力に触れ、地域のファンになってもらえるよう、京都スタジアムや京都トレーニングセンターなどを活用し、スポーツで身体を鍛え、自然・歴史文化を学ぶ“京都丹波まるごと体感ツアー”の取組を推進します。
- 4 市町や地域団体などオール京都丹波で、食や文化、スポーツなど京都丹波の森の魅力を体感できるイベントを開催し、「森の京都・京都丹波」の魅力を広く発信します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
- 5 インスタ映えスポットの発掘・紹介や、京都丹波の魅力をテーマにしたデジタル旬会・写真展の開催を行い、「京都丹波ファン」によるインスタグラムやフェイスブックなどSNSを活用した京都丹波の魅力発信を促進します。
- 6 京都丹波観光のモデルコースを紹介するプロモーション動画を作成し、京都スタジアムをはじめ8つの道の駅や観光施設等に「京都丹波PRコーナー」を設けて情報発信するとともに、「道の駅スタンプラリー」とも連携し、周遊・滞在型観光を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
- 7 市町の資料館や博物館等と連携して、郷土愛の醸成を図る企画展や常設展を通じて、住民自らが地域の魅力を再発見するよう促します。
また、観光協会や商工会、森の京都DMO等と連携して、京都丹波地域全体を野外博物館と位置づけ、住民一人ひとりが地域学芸員・語り部になれるよう「森の京都」を学ぶ機会を設け、地域の豊かな自然・歴史文化を活かした交流拡大や地域振興を推進します。
【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
- 8 京都丹波の生産者と有名ホテルの料理人によるグルメの集いなど、京都丹波地域ならではの食を味わいながら、その背景の歴史・文化・風土を含めて楽しむ「ガストロノミーツーリズム」の取組を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』】
- 9 里地・里山文化の発信拠点である京都丹波高原国定公園ビジターセンターや、芦生の森、美山かやぶきの里、映画ロケ地などの観光資源を活かし、森の京都DMOと連携して、食や森林浴、文化、スポーツ体験などを盛り込んだ新たな観光ルートの開発や着地型旅行商品の造成・販売、観光プロモーションを行います。【横断プロジェクト『食』、『自

然・歴史文化』、『スポーツ』】

- 10 森の京都地域の歴史的魅力や文化・伝統を活かした地域づくりを一層推進するため、「都を支えた丹波・北山と保津川文化」をテーマに日本遺産の認定を目指します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
- 11 新たな観光資源を発掘するため、若者や地元住民、他の地域の住民から広くアイデアを募集するコンテストを実施し、森の京都DMOと連携して周遊・滞在型観光ツアーの造成・実施に取り組みます。
- 12 地域アートマネージャーや地域の文化団体等と連携し、アーティスト・イン・レジデンスの活動に取り組むなど、京都丹波の文化を活用した地域の活性化を推進します。

イ 京都スタジアムを核にしたスポーツの振興・まちの賑わいづくり

- 13 京都スタジアムにVR・eスポーツの環境を整備し、新たなスポーツ体験を提供する他、バーチャルで京都丹波を旅するプロモーション動画を上映するなど、京都スタジアムを「森の京都・京都丹波」のゲートウェイとして、京都丹波地域全体への誘客を促進します。【横断プロジェクト『スポーツ』】
- 14 NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放送を契機に、京都スタジアムに設置される大河ドラマ館などを活用し、市町と振興局からなる「京都丹波観光協議会」や旧丹波国を構成する京都府と兵庫県の7市町からなる「大丹波連携推進協議会」等と連携し、光秀ゆかりの城めぐりなど、テーマ性を持った広域観光を推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
- 15 京都スタジアムの集客機能を活かし、商店街の活性化や賑わいの街づくり等、亀岡市等と連携して、スタジアムを核としたまちづくりを推進します。【横断プロジェクト『スポーツ』】
- 16 JR千代川駅付近に新たな観光拠点を整備のうえ、千代川から保津までの新たな川下りコースを開発し、スタジアムの集客につなげるとともに、観光客のさらなる周遊を促進します。【横断プロジェクト『スポーツ』】
- 17 京都市内のJR各駅や観光スポット等において、パブリックデジタルサイネージ等の活用により、京都スタジアムや京都丹波の魅力をPRして誘客を促進します。
- 18 管内全ての市町が「京都サンガ・ホームタウン」という利点を活かし、少年サッカー教室の開催や地域のお祭りへの選手参加等により、地域の交流や賑わいづくりを図ります。
- 19 都市近郊でパラグライダーやラフティングなど数多くのアウトドアスポーツが楽しめる京都丹波地域の特徴を活かし、スポーツ関係団体等で構成する「京都丹波・まるごとスタジアム化推進協議会」により、食や歴史文化等の地域資源を組み合わせた「スポーツ観光」を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
- 20 「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」のホストタウンとなる市町を支援し、地域の活性化、交流が継続されるよう取り組みます。

21 「ワールドマスタースゲームズ2021 関西」や「京都丹波トライアスロン大会 in 南丹」など世界規模のスポーツ大会の開催を捉え、商店街等と連携した地域の賑わい創出や、国内外から集まる参加者に地域の魅力を体感できる滞在プランを提案し、京都丹波ファンを増やします。【横断プロジェクト『スポーツ』】

(2) 人権が尊重され、希望を持って元気に活躍できる地域づくり

<基本的な考え方>

- 地域が抱える様々な課題を解決していくためには、何よりもまず、一人ひとりの人権が尊重され、多様な主体が参画できる社会を形成することが必要です。近年、インターネット上の人権侵害やヘイトスピーチ、LGBT等性的少数者に関する問題など、人権に関わる新たな課題が顕在化している中、引き続き、人権問題に対する啓発や相談体制の確保に取り組みます。
- また、地域活動の活性化を図るため、NPO等地域活動団体や地域住民等様々な主体の協働・連携や、自発的な活動を支援するとともに、女性や高齢者、障害者等をはじめ、誰もがその能力を活かして活躍できる地域社会の実現を目指して、女性や高齢者等の交流の場の提供や障害者の生活支援・社会参画等を推進します。
- さらに、京都丹波地域は、府全体を上回る高齢化が進展しています。また、要介護や認知症の増加に伴い、介護や在宅生活に関する問題が顕在化しています。このため、管内の医療・介護・福祉の関係機関が連携し、地域包括ケアの取組をさらに進めていくとともに、「森の京都」の豊かな自然環境や京都トレーニングセンターなどのスポーツ資源を活かした生涯にわたる健康づくりを進めます。

<現 状>

《住民主体による地域づくり》

○府と地域団体等が協働・連携して地域課題解決に取り組むプラットフォーム数

2013年度：14件 ⇒ 2017年度：34件

《高齢化率の推移》

35年間で20.9ポイント増の見込み（府内：15.9ポイント増の見込み）

(%)

	2005	2010	2015	2020	2025	2030	2035	2040
管内	21.3	24.5	29.6	33.3	35.6	37.5	39.4	42.2
府内	20.2	23.4	27.5	29.5	30.3	31.5	33.2	36.1

《要介護者（要支援）認定者数の推移（対65歳以上人口比）》

10年間で2.8ポイント増の見込み（府内：3.5ポイント増の見込み）

(%)

	2015	2020	2025
管内	18.3	18.9	21.1
府内	19.7	20.9	23.2

（注）第8次京都府高齢者健康福祉計画の数値に基づき算出

《認知症高齢者数の推移（対65歳以上人口比）》

10年間で3.2ポイント増の見込み（府内：6.4ポイント増の見込み）

(%)

	2015	2020	2025
管内	15.8	16.8	19.0
府内	14.6	17.9	21.0

（注）第2次京都府認知症総合対策推進計画の数値に基づき算出

《健康づくり》

○府内平均を下回る日常の運動状況

- ・日常生活における1日平均歩行数

2016年：6,310歩 府平均：6,711歩

- ・運動習慣のある者の割合

2016年：33.2% 府全体 37.4%

○目標を下回る栄養等の摂取状況

- ・野菜摂取目標350gに届かない者の割合

2016年：男性70.8% 女性73.1%

- ・食塩摂取目標 男性8g未満、女性7g未満に届かない者の割合

2016年：男性74.2% 女性73.1%

ア 女性や高齢者、障害者等誰もが活躍できる地域づくり

①部落差別や、女性、障害者等に対する差別等、様々な人権問題の解決に向けた施策を推進します

- 1 部落差別や、女性、障害者等に対する差別、ヘイトスピーチ、LGBT等性的少数者の問題など様々な人権課題に対して、人権強調月間や人権週間での街頭啓発、市町の実施する啓発事業への支援や、人権問題法律相談などにより、効果的な啓発や相談体制の確保に取り組みます。

②NPO等地域活動団体やボランティア等との協働による地域づくりを推進します

- 2 持続的な地域活動を進めるため、京都丹波パートナーシップセンターの機能を充実するとともに、かめおか市民活動推進センターや南丹市まちづくりデザインセンター等と連携し、地域活動団体の交流会や活動に役立つセミナー等地域の課題解決を図る取組を推進します。また、管内に多様な高等教育機関を有するという地域特性を活かし、学生の積極的な地域活動を支援します。
- 3 住民主体の地域課題解決の取組を「地域交響プロジェクト交付金」により支援するとともに、特に地域の支えが必要な取組については、「パートナーシップ・ミーティング」での地域団体同士の意見交換等を通じて、ブラッシュアップを図ります。

- 4 ワールドマスターズゲームズ2021 関西をはじめ、管内で開催される全国規模のスポーツ大会等のボランティアが、京都丹波地域の様々な地域活動に引き続き参画されるような仕組みづくりを進めます。【横断プロジェクト『スポーツ』】
- 5 亀岡市が地域住民やNPO等地域活動団体、大学等と連携して取り組む「セーフコミュニティ」を支援するとともに、管内の他の地域に「セーフコミュニティ」の理念を広げ、安心・安全な地域づくりを進めます。
- 6 地域の高齢者や障害者、児童等、配慮を要する人たちを、市町や地域の関係者が地域で見守るシステムを構築し、新たな見守り活動を展開する取組を支援します。
- 7 地域活動団体との協働により、子どもたちがイベントで和太鼓等を発表する場を提供したり、高校や企業との協働により、子ども向けものづくり体験会を開催するなど、様々な文化体験や社会体験を通じて次世代の育成を支援します。
- 8 「京都丹波美術工芸教育展」や「京都丹波キッズふれあい駅伝」の開催など、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学等学校種間の連携に取り組み、年齢を超えた交流を推進します。

③オール京都丹波による女性や高齢者が活躍できるまちづくりを推進します

- 9 女性や高齢者がいつまでもいきいきと活躍できるよう、NPO等地域活動団体とのネットワークを構築し、就労やボランティア活動、スポーツ・文化活動など生涯現役で活躍するための情報の一元的な提供や交流の場の提供を行います。
- 10 女性や高齢者の「起業」のニーズを踏まえ、商工関係団体や地元金融機関等との協働による相談や研修会等の開催を通じた「起業」の支援を行います。

④障害者の生活支援・社会参画を推進します

- 11 京都丹波地域の拠点である「きょうと農福連携センター中サテライト」が行う障害者と農家のマッチング、商品開発や販売ルートの確保などに取り組みます。
また、京都丹波地域の事業所や行政等で構成される「京都丹波地域農福連携推進協議会」との協働により、障害者の就労支援を進め、収入の向上を図ります。【横断プロジェクト『食』】
- 12 南丹圏域障害者総合相談支援センター「結^ゆ丹^だ」や市町、福祉施設等からなる障害児者総合支援ネットワーク「ほっとネット」を核として、障害者のライフステージ全般にわたる総合支援体制の充実を図り、障害者が住み慣れた地域で自立した生活が送れるよう支援します。
- 13 障害者の収入増加を図るため、オリジナルブランド「ぬくもり京都丹波」等の商品の販売促進を強化します。
- 14 「みずのき美術館」と連携した障害者による「アール・ブリュット」の芸術作品の創作・発表や、丹波自然運動公園で開催する「全京都車いす駅伝競走大会」の開催支援などを通じて、障害者がいきいきと社会参加できる取組を進めます。

イ スポーツ資源等を活かした健康長寿の地域づくり

①「健康の森プロジェクト」を推進します

- 15 京都スタジアムや丹波自然運動公園などを活用し、サッカー等の球技やクライミングを通じた健康づくりを進めます。また、京都トレーニングセンターが明治国際医療大学等と連携して、スポーツ医・科学や情報分析、栄養指導等の多角的な支援を充実させ、将来のトップアスリートを発掘・育成するとともに、ジュニア世代からの競技力を強化します。【横断プロジェクト『スポーツ』】
- 16 京都丹波の地場野菜やジビエ等を活用した食事の提供や、適切な量と質の食事を選択して摂取できる「けんこう食堂化プロジェクト」を推進し、企業や大学等に対して食を通じた健康づくりを進めます。【横断プロジェクト『食』】
- 17 野菜たっぷり、介護予防、減塩に配慮した「なんたん・かんたん・やさしい料理レシピ」を直売所で配布するとともに、ホームページにおいて普及啓発を行い、関係団体での採用を促進することにより、心疾患、腎疾患、糖尿病予防を進めます。【横断プロジェクト『食』】
- 18 誰もが健康づくりに取り組めるよう「京都丹波の森のウォーキングコース」を充実させ、コースや交通手段等の情報をわかりやすく発信するとともに、市町が実施する周遊型ポイントラリーに組み込んで普及を図るなど、「森の京都」の豊かな自然や歴史文化を活かした健康づくりを推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
- 19 子どもから高齢者まで気軽に参加でき、継続的に様々なスポーツを楽しめる総合型地域スポーツクラブの取組を支援し、体力づくり・健康づくりを推進します。【横断プロジェクト『スポーツ』】
- 20 総合的な介護予防を推進するため、「なんたん元気づくり体操」をはじめ、お口の健康、適切な栄養、食事の摂り方を併せて普及し、住民主体の健康づくりを進めます。

②京都丹波式地域包括ケアを推進します

- 21 がん、脳卒中、心筋梗塞等、主要な疾病に応じて、急性期から回復期、在宅に至るまで、切れ目なく医療が提供できるよう、地域医療支援病院である京都中部総合医療センターを軸にした圏域医療機関の医療分担を図り、地域の実情に即した広域的な地域医療連携体制の整備を進めます。
- 22 認知症になっても本人の意思が尊重され、住み慣れた地域で安心して暮らせるように、認知症の初期から重度までのサービス提供や地域のサポートを行う「認知症ケアセンター」の開設を目指します。
- 23 医師や看護師、介護従事者等の人材不足、偏在化に対応するため、医療と介護・福祉分野を一体化した人材フェアを、市町と連携して開催します。
- 24 保健所や福祉事業所、関係団体が参画する「京都丹波福祉職場応援プロジェクト促進会

議」を中心に、介護ロボットや見守り機器の展示や体験を行う「福祉機器体験型セミナー」や、「京都丹波福祉職場応援ムービー」等により、福祉職場の負担軽減や人材の確保を推進します。

25 オール京都丹波で、健康長寿や地域包括ケアを推進するために、これまで行ってきた人材育成、情報提供の取組を活かして、市町の地域支援事業を支援します。

(3) 明日の京都丹波産業を担う人づくり

<基本的な考え方>

- 京都丹波地域は、京阪神地域等へのアクセスの良さを背景に、高い技術力を有する多種多様なものづくり企業が集積しており、農林畜産業でも府内随一の生産量を誇るなど、産業が盛んな地域です。また、管内には様々な専門分野にわたる特色ある高等教育機関が数多く設置されており、産学公連携の取組が進みつつあります。
- 一方で、中小企業を中心に人材不足が一段と深刻化しています。また、農林畜産業では、農家の減少や高齢化が進んでおり、新規就農者や後継者の確保・育成が農業経営の最大の課題となっています。
- このような中、地元企業等と連携した人材育成や、ロボット技術による省力化などにより、人材不足の解消に取り組むとともに、産学公の連携を一層促進させてイノベーションを創出し、企業活動の活性化を図ります。

また、農林畜産業でも、IoT等の先端技術導入による生産拡大や品質向上、ブランド化による販路拡大を進め、「儲かる産業」に高めて就農意欲の向上を図るとともに、新規就農者の経営安定や、若手後継者の経営革新の支援を一層強化します。

なお、とりわけ人材不足が深刻な林業については、林業大学校や地元の林業事業体等とも連携し、「森の京都」推進の原動力となる森林の担い手育成と地元雇用に、積極的に取り組みます。

<現 状>

《ものづくり産業》

○機械金属、電気・電子、食品等をはじめ多様な業種のものづくり企業が集積

- ・ 製造品出荷額は増加傾向

2010年：3,038億円 ⇒ 2017年：3,498億円（15.1%増）

《高等教育機関》

○多様な高等教育機関が集積

- ・ 4大学：京都先端科学大学、明治国際医療大学、京都医療科学大学、京都美術工芸大学
- ・ 3大学校：京都伝統工芸大学校、京都建築大学校、林業大学校
- ・ 1専門校：公立南丹看護専門学校

《農林畜産業》

○農業就業人口は5年間で約1割減少

- ・ 2010年度：6,575人 ⇒ 2015年度：5,883人

○林業労働者数は10年間で約4割減少

・2007年度：211人 ⇒ 2017年度：125人

○林業経営体は10年間で約5割減少

・2004年度：1,294体 ⇒ 2014年度：646体

○家畜飼養者戸数は10年間で約7割減少

・2007年度：552戸 ⇒ 2017年度：203戸

ア 特色ある高等教育機関の集積や立地条件を活かした商工業振興

- 1 京都先端科学大学等の高等教育機関や企業との産学公連携により、国家戦略特区制度等を活用して規制緩和を進め、ドローンによる災害調査、測量などの研究開発・実証実験を支援します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
- 2 南丹高等学校テクニカル工学系列と地元パートナー企業との連携を促進し、地域ぐるみでのものづくりを担う人材の育成、製造現場を支える技術・技能の伝承を支援します。
- 3 京都美術工芸大学と京都新光悦村に立地する企業等の産学連携を進め、京都丹波地域の伝統工芸を担うものづくり人材の育成に取り組みます。
- 4 最先端の研究開発を行っている大手企業と優れた技術を持つ管内の中小企業等のマッチングを促進して、管内企業が医療、伝統工芸、健康、スポーツ、バイオなどの様々な分野で、共同開発や受注機会の拡大を支援します。
- 5 高速道路網や企業集積を活かして、新たな商業施設や物流拠点の整備を支援するとともに、多様な分野の企業誘致を進めて、継続的な地域内経済の好循環を作り出していきます。
- 6 府及び京都商店連盟、京都府商店街振興組合連合会からなる商店街創生センターと連携し、管内の企業やまちづくり団体など多様な主体のネットワーク化を進めるとともに、地域住民が入れあえるコミュニティの場としての商店街振興を図ります。

イ 京都丹波ブランドを支える特産農産物等の生産拡大・品質向上

- 7 3年連続特Aを獲得している米（キヌヒカリ）や黒大豆、小豆、京野菜など日本を代表する農産物の生産拡大と品質向上のため、農林水産技術センターや農業生産法人、JA、企業、大学等が連携して立ち上げた「スマート農業実証コンソーシアム」において、国営ほ場整備農地のスケールメリットを活かした自動運転機器導入による農作業の省力・軽労化を促進します。
- 8 農業改良普及センターを中心に有機農業サロンによる研修会や情報交換会等を開催して、エコファーマーや京都こだわり生産認証制度など環境にやさしい農業を推進します。
- 9 丹波くりの振興を図るため、生産者やJA、林業団体、森林技術センター、振興局からなる「京都府丹波くり振興戦略会議」を核として、里山や耕作放棄地を有効利用した新規くり園づくりや新規参入者を支援するとともに、旧丹波国を構成する京都府と兵庫県

の7市町からなる「大丹波連携推進協議会」や「森の京都 DMO」と連携し、効果的な情報発信、販路拡大に取り組みます。

- 10 林業の振興を図るため、地域内に次世代建材の直交集成板（CLT）大型加工施設の建設を支援するとともに、大型木材加工施設に安定供給できるよう森林組合等と連携し、間伐材等丸太の生産量の増加を図り、地域産木材の利用拡大を促進します。
- 11 経営管理が行われていない森林の所有者と担い手を繋ぐシステムを構築する「森林経営管理制度」の円滑な運用を図るため、仲介役となる市町や、森林組合等の林業事業体を支援し、適切な森林の管理と整備を促進するとともに、森林資源の活用拡大を図ります。
- 12 未利用の間伐材や製材端材等を、チップや木質ペレット、薪として加工し、木質バイオマスエネルギーとして利用拡大を図るとともに、森の京都DMOと連携して、バイオマスを開催するなど、バイオマス利用についての理解を広めます。
- 13 畜産・耕種農家からなる「飼料用米生産利用推進研究会」の耕畜連携を支援するため、畜産センター、農業改良普及センター及び農林センターが連携して、飼料用米の低コスト・多収栽培の研究・普及拡大に取り組み、資源循環型の畜産・農業を促進します。

ウ 地元企業や関係団体等と連携・協働した人材育成・確保

- 14 立地企業や地元の高等教育機関等との産学公連携によりAIやIoT等の先端技術の導入を促進し、ものづくり等様々な分野に関わる人材の育成や確保を支援します。
- 15 振興局や市町、商工会議所、京都産業21及びジョブパークからなる「京都丹波中小企業Aチーム」が連携して管内企業を訪問し、商品開発や販売開拓、設備投資、人材育成をワンストップで支援する取組を一層進めます。
- 16 持続的な地域農業を実現するため、集落営農組織等の経営体を取り組む加工・販売や法人化への支援を進めます。また、担い手の育成・確保や雇用促進への支援を進めます。
- 17 農芸高校が進めるグローバルGAPやスマート農業の取組を支援するとともに、企業等との連携を図り、農業・農村の担い手となる人材を育成します。
- 18 林業大学校と地元の森林組合や林業事業体が連携し、インターンシップで受け入れるなど積極的に学生との交流を図り、育成した担い手の地元雇用を促進します。
- 19 京都産和牛（繁殖、肥育）の生産拡大や販路開拓、加工品開発など新たな経営戦略の構築を目指す人材を育成する「和牛塾」、「畜産後継者チャレンジセミナー」の開催等により、畜産業の未来を担うトップランナーとなる後継者育成に取り組みます。

(4) オール京都丹波による移住・定住プロジェクトの推進

<基本的な考え方>

- 少子高齢化や人口減少の著しい進展により、労働力人口の減少や地域の伝統文化の担い手不足等が深刻になり、地域の活力の維持・発展が困難になるといった問題が顕在化しています。
- 今後、持続可能な地域づくりを進めていくためには、地域外から人を呼び込む移住の促進を図り、移住者や若者がいつまでもこの地域に住み続けたいと思える取組を行うことが必要です。
また、仕事や子育ては、移住者にとって最大の関心事であることから、特にこの分野に重点的に取り組むことが、移住・定住を進める上で重要です。
- このため、大都市に近く暮らしやすいという京都丹波の強みを活かした移住・定住を推進することとし、とりわけ移住希望者が多い30歳代の地元出身者を中心としたUターンの促進を地元企業とも連携しながら取り組みます。
また、子育てしやすい地域は、若い世代を含めて全ての世代にとって暮らしやすい地域であり、移住・定住を考える上で魅力となることから、「子育て環境日本一」を目指して、地域全体で子育て家庭を支援する「子育て文化」の醸成等に積極的に取り組みます。
こうした取組を通じて、住民が地域への愛着や誇りを持ち、定住が進む地域づくりへと繋げていきます。

<現 状>

《移住・定住の促進》

○人口の推移

30年間で31.9%減の見込み（府内：15.1%減の見込み）（人）

	2010	2020	2030	2040
管内	143,345	130,269	114,812	97,553
府内	2,636,092	2,573,772	2,430,849	2,238,226

○生産年齢人口の推移

30年間で47.7%減の見込み（府内：27.3%減の見込み）（人）

	2010	2020	2030	2040
管内	88,834	71,509	59,462	46,504
府内	1,653,812	1,518,762	1,409,564	1,203,061

○産学公連携による「京都丹波移住・定住促進協議会」や移住コンシェルジュ等と連携した、オール京都丹波による移住・定住に向けた取組により、移住者数は増加

・移住者数 2015年度：23人 ⇒ 2017年度：129人

《都市農村交流の促進》

○農家等への教育体験旅行の受入

- ・旅行受入数 2011年度：340人 ⇒ 2017年度：3,740人（11倍に増加）

《子育て支援対策の推進》

○出生数の推移

10年間で20.5%減（府内：15.2%減） (人)

	2008	2013	2014	2015	2016	2017
管内	1,046	983	946	902	889	832
府内	21,839	20,104	19,583	19,644	19,327	18,521

○子育てピアサポーター、子育て支援リーダーの育成の状況等

- ・子育てピアサポーター67人、子育て支援リーダー147人（2017年度末）

○きょうと子ども食堂（2018年度補助対象）4箇所

○こどもの居場所（2018年度補助対象）2箇所

○きょうと子育て応援パスポート協賛店舗数 280店舗（2019年2月末）

ア 住まい、仕事、子育てがしやすい「森の京都・京都丹波ライフスタイル」の発信

①オール京都丹波による移住・定住の取組を推進します

- 1 振興局や市町、金融機関、大学、NPO法人等で構成される「京都丹波移住・定住促進協議会」を中心に、移住に積極的に取り組む管内の企業を「京都丹波Uターン応援隊企業」として、企業の魅力や採用情報を一元的に情報誌やWebサイト等で発信し、特にUターン対策に積極的に取り組みます。
- 2 移住希望者が多い30歳代でUターンをこれから考える人と先輩Uターン者などが集まり、Uターンの悩み等を解決するグループワーク等を行う交流会を開催します。
- 3 既移住者の暮らしやノウハウ、地域の魅力などを伝えたり、京都丹波の自然を体感してもらうセミナーや相談会の開催等により、「森の京都・京都丹波ライフスタイル」を発信します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』】
- 4 在留外国人の増加に伴う移住・定住を支援するため、日本語学習や交流の場づくりなどに取り組んでいるNPO等地域活動団体の活動を、京都丹波パートナーシップセンターや市町等と連携して支援します。
- 5 都市農村交流を通じて移住・定住を促進するため、森の京都DMOと連携し、教育体験旅行の推進に加え、インバウンドや京都市内からの周遊客をターゲットとした食や農業体験のツアープランの開発を支援します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』】
- 6 移住希望者の選択肢を充実させるため、市町等と連携して「空き家活用プラットフォーム」を創設し、空き家の掘り起こしを進めます。
- 7 原生的な自然を残す「京都丹波高原国定公園」など子どもたちが豊かな自然を体感でき

る取組や、「佐伯灯籠人形浄瑠璃」、「丹波八坂太鼓」などの優れた歴史的・文化的行事を発表する場を子どもたちに提供し、次世代へ文化の継承を支援します。また、地域の自然・歴史文化について学ぶ授業や視察を市町と連携して行う等、高校生に対する郷土愛の醸成を図ります。

②「子育て環境日本一」の京都丹波を実現します

8 市町やNPO等地域活動団体、企業等各界各層によるネットワークを構築するため、協議会を立ち上げ、子育てに優しい職場づくりに積極的に取り組む管内企業を「京都丹波子育て応援隊企業」として支援制度の周知、啓発を行います。

9 小中高校生が乳幼児とふれあい、命の大切さや子育てに関心を持つ機会を創出する学習プログラムの普及を積極的に支援するとともに、高校生が学校において乳幼児とふれあい、結婚や子育てなど自らのライフデザインを考える機会を提供します。

また、若い世代が、子育ての楽しさや大変さを体験したり、子育て中の親同士や子育て支援NPO相互の交流を促す「子育て応援フェア」を開催し、オール京都丹波で「子育て文化」を醸成します。

10 発達障害児への早期支援を行うため、対象児へのソーシャルスキルトレーニングの実施を促進するなど、市町や花ノ木児童発達支援センター等の関係機関と連携して支援体制を構築します。

また、就学への連携をスムーズにしていくために、支援ファイル・移行シートの普及と効果的な活用を促進します。

11 農作業体験などの体験型食育や地元産食材を使用した学校給食における地産地消、望ましい食習慣の形成など、大学や企業等との連携により、子ども達が食の大切さや京都丹波の食文化を大切にする気持ちを育みます。【横断プロジェクト『食』】

(5) 交流と安心・安全の基盤づくり

<基本的な考え方>

- 京都丹波地域は面積が広大で山間地域が多いため、地域産業を支え、地域活力を支えるためには、道路ネットワークの整備が必要です。

2010年3月のJR山陰本線京都一園部間の複線化、2015年7月の京都縦貫自動車道の全線開通等、鉄道と道路の整備により京阪神の主要都市との交通利便性は飛躍的に向上しましたが、引き続き、阪神地域へのアクセス道路や管内地域間を結ぶ道路の整備等を進めるとともに、JR山陰本線の利便性の向上など、道路と鉄道が一体となった交通ネットワークの整備を推進します。

- また、近年、集中豪雨が多発し、毎年のように全国各地で洪水や土砂災害が発生していますが、特に、京都丹波地域においては、2018年の7月豪雨をはじめ、相次ぐ台風等により、甚大な被害を受けました。

京都丹波地域では、広大な山間地域と桂川、由良川の大河川を有することから、今後ともまちづくりと一体となった河川改修を計画的に進めるとともに、急傾斜地整備や治山事業の実施など、土砂災害防止対策の推進を図ります。

- 併せて、自然災害や感染症など、様々な危機に適切に対応できるよう、警察や消防、行政による安心・安全の取組に加え、住民一人ひとりが安心・安全の意識を高めるとともに、地域ぐるみで危機意識を共有し、危機に備える取組を進め、安心・安全な京都丹波づくりをより一層推進します。

さらに、市町やNPO等地域活動団体、地域住民等との協働により、里山を有効活用するとともに、土砂災害の防止や水源のかん養、保健休養の場の提供、生物多様性の保全など森林の持つ多面的な機能に着目して、モデルフォレスト活動など豊かな自然環境の保全に取り組み、住みやすい京都丹波づくりを進めます。

<現 状>

《交通網の整備》

- ・ 2010年3月、JR山陰本線京都一園部間の複線化
- ・ 2013年4月、京都第二外環状道路完成
- ・ 2015年7月、京都縦貫自動車道が全線開通
- ・ 2017年12月、新名神高速道路高槻一川西開通（箕面とどろみIC開設）

《河川の整備》

○桂川上流圏域では、100年に1回の洪水に対応する日吉ダムの完成により、浸水被害の発生回数は減少したものの、近年の集中豪雨により、浸水面積・浸水戸数ともに大きな被害が生じている。

- ・2013年台風18号：浸水戸数366戸、浸水面積282ha、園部川堤防決壊
- ・2018年7月豪雨など：閉亀川土砂災害など

《管内の主な危機事象》

- | | |
|-------------------|------------------|
| ・2003年5月16日～21日 | 重症急性呼吸器症候群（SARS） |
| ・2004年2月27日～4月13日 | 高病原性鳥インフルエンザ |
| ・2004年10月20日～21日 | 台風23号 |
| ・2013年9月15日～16日 | 台風18号 |
| ・2014年8月15日～16日 | 豪雨 |
| ・2017年10月21日～23日 | 台風21号 |
| ・2018年7月5日～8日 | 平成30年7月豪雨 |
| ・2018年9月4日～5日 | 台風21号 |

ア 京都縦貫自動車道からのアクセス道路の整備促進

①「京都丹波」と大都市圏を結ぶ道路を整備します

- 1 阪神地域と亀岡市街地を結び、地域振興にも寄与する国道423号（法貴バイパス）の整備を推進します。
- 2 緊急輸送道路ネットワークの確保、地域産業等への寄与や大阪方面との交流拡大が期待できる枚方亀岡線及び茨木亀岡線の整備を検討します。
- 3 京都市と亀岡市を結ぶバイパス等のネットワーク強化を促進します。

②「京都丹波」の交通ネットワークを整備して地域間の交流を促進します

- 4 京都縦貫自動車道八木東ICへのアクセス強化を図るとともに、地域振興に寄与する国道477号（西田大藪道路）の整備を推進します。
- 5 交通量が多く慢性化している渋滞の緩和を図るとともに、児童等歩行者の安全確保に向け、国道9号の整備を促進するとともに、国道9号下矢田交差点までの枚方亀岡線の整備を推進します。
- 6 幅員狭小で線形不良のため大型車の離合が困難となっている宮前千歳線、東掛小林線、南丹市の国道372号（南八田道路）、綾部宮島線（肱谷バイパス）の整備を推進します。
- 7 災害時等における孤立集落の発生を防止するとともに、広域的な交流拡大が期待できる国道162号・京都広河原美山線の整備を検討します。
- 8 川東地区と亀岡市街地を結び、地域振興にも寄与する亀岡園部線の整備とともに、橋梁の老朽化が進む郷ノ口余部線（宇津根橋）の整備を推進します。
- 9 亀岡市街地の渋滞緩和、児童等歩行者の安全の確保に向け、都市計画道路である並河亀岡停車場線の整備を推進します。
- 10 南丹市北部地域と南丹市街地を結び、地域振興にも寄与する園部平屋線の整備を推進し

ます。

- 11 海外からのインバウンド旅行者は、京丹波地域の潜在的な魅力を掘り起こす原動力であるため、翻訳対応タブレット端末の整備などにより、観光関連施設での観光情報や避難情報を正確に伝えるユニバーサルな仕掛けを展開し、さらなる誘導を図ります。
- 12 JR山陰本線園部以北の複線化に向け取り組むとともに、嵯峨野線京都園部間の利便性向上、鉄道駅舎のバリアフリー化、ICカードエリアの拡大等により、利用を促進します。
- 13 都市の維持コスト低減や観光客の誘導に、交通結節点の整備が重要であり、園部停車場線の拡幅と電線地中化を推進し、鉄道とバス・タクシー、キッス&ライド等の利便性を拡充します。

イ 桂川等河川整備など災害対策の推進

①治水安全度の向上に向けた河川を整備します

「桂川上流圏域河川整備計画」に基づき、治水安全度の着実な向上を図ります。

- 14 桂川の治水安全度を向上させるため、国と連携し、上流、下流のバランスにも十分配慮し、霞堤嵩上げ（約1m）を実施するなど、河川整備を計画的かつ着実に進めていきます。
- 15 園部川、千々川、東所川について、桂川改修との整合を確保しながら治水安全度の向上を図るため、河川改修事業を推進します。
- 16 雑水川、七谷川について、桂川の支川改修に当たって、自然環境の保全に配慮しながら、河川改修事業を推進します。
- 17 閉亀川について、土砂災害から生命・財産を守るため、堰堤及び溪流保全工の新設を推進します。
- 18 高屋川について、治水安全度の向上を図るため、浸水被害の軽減に向けて、護岸整備等の河川改修を推進します。
- 19 篠原西一谷川、上乙見川、大町谷川、谷山川、菖蒲谷川について堰堤の新設を、園部川（瑠璃溪）、津の本谷川について既存堰堤の改良を推進します。

②災害に強いまちづくりを推進します

- 20 災害の未然防止のため、老朽化したため池について、市町と連携し、改修やハザードマップの作成を進めるとともに、2018年7月豪雨等を踏まえ、利用されなくなったため池の統廃合などを進めます。
- 21 2017年、2018年の集中豪雨や台風により発生した山腹崩壊や土砂流出など激甚な森林災害に対応するため、被災箇所において治山事業を実施し、早期の森林復旧や人家集落への土砂流出災害等の未然防止を図ります。
- 22 近年の手入れ不足や台風が原因の風倒木、流木等の危険木を除去し、流木被害の未然防

止を図るとともに、土砂の異常堆積によって防災機能が低下している既設治山施設について、土砂の浚渫を実施し、防災機能の回復と森林災害の未然防止を図ります。

- 23 天引、穴人、内林町、平松について、崖崩れを防ぐ擁壁等の整備を推進します。
- 24 2017年度の雪害や2018年度の台風21号などによる被害を踏まえ、農業用パイプハウスの倒壊防止のための補強や予防策の情報発信を進めます。
- 25 土砂災害警戒区域・土砂災害特別警戒区域の指定の完了を目指します。
- 26 台風や豪雨等に備え、日吉ダムと下流域自治体とのタイムリーで実効ある情報ネットワークをさらに進めるとともに、水害等に備えた自主防災組織の避難行動タイムラインの作成を支援します。
- 27 トンネル、橋りょうなど老朽化が進む各種インフラに対し、点検と補修による予防保全により、インフラの長寿命化を推進します。
- 28 交差点や橋りょう、横断歩道、道路表示板、トンネル等の照明のLED化を推進し、交通安全の充実に図ります。
- 29 工事説明会や見学会等を開催し、地域住民の意見を取り入れながら、道路や河川の整備を推進します。
- 30 府民協働型インフラ整備事業を活用し、地域に暮らす住民の視点から、身近な安心・安全につながる小規模な工事及びインフラの劣化等に対する整備を推進します。
- 31 小学生に公共施設の機能や重要性について理解を深めてもらうため、授業の中で道路・河川等の役割の説明や、学校近くの工事現場の見学などを行います。
- 32 地域防災リーダーの育成や防災教室等を開催し、大規模な災害から自分たちの身を守れるよう、地域防災力の向上を図ります。
- 33 原子力災害に備え、市町や関係機関と連携した広域避難訓練の実施や避難路の整備を進め、広域避難計画の実効性を高めます。
- 34 保健所や市町、医療関係者等による南丹地域災害医療連絡協議会の開催及び災害医療訓練を実施し、災害時における南丹地域の医療体制の強化や、災害医療の人材確保等を図ります。
- 35 災害時要配慮者の避難を円滑に行うため、市町における個別避難計画の作成を促進するとともに、医療的ケアが必要な難病患者や小児慢性疾患患者の安全を守るため、自治会や民生委員・児童委員等支援関係者とともに個別の行動計画の策定を支援します。

ウ 暮らしの安心まちづくりの推進

有害鳥獣対策をはじめ、あらゆる危機事象への迅速・的確な対策を講じ、安心・安全で住みやすい京都丹波にします。

①有害鳥獣や家畜伝染病に対する備えを強化します

- 36 府と市町、専門家等で「鳥獣被害集落診断チーム」を組織し、有害鳥獣の被害状況を分析し、集落ごとに効果的な捕獲方法や侵入防止柵の設置、寄せ付けないための方策を示

した「対策カルテ」を住民に普及させ、実践を促します。また、効果検証を行い、地域ぐるみでより有効な有害鳥獣対策に取り組めるよう支援します。

37 市町や有害鳥獣捕獲班員と連携し、ICT捕獲檻の導入などにより捕獲者負担の軽減を図り、集落も協力し捕獲水準を維持する地域ぐるみの捕獲に取り組みます。

また、猟友会等による食肉処理加工施設の整備を支援し、狩猟から捕獲、販売までの一貫した対策の取組を推進します。【横断プロジェクト『食』】

38 京都丹波は、府内で最も畜産が盛んであることから、高病原性鳥インフルエンザや口蹄疫、豚コレラ等の家畜伝染病を発生させないよう、日常から万全の衛生対策を講じるとともに、発生に備えて独自のスターチーム員による初動防疫に取り組めます。

②感染症対策を推進します

39 新型インフルエンザ等新たな感染症による危機対策として、市町や医療機関等と連携を図りながら、感染の予防や拡大の防止に向けた体制づくりを推進します。

40 高齢者施設などにおける感染性胃腸炎、インフルエンザなど感染症の集団感染の早期終息を図るため、発生の早期探知、施設での対策・助言を行います。また、施設職員への研修、感染症発生動向のメール配信、出前講座等を実施し、施設内の体制整備を支援します。

③京都丹波の豊かな自然環境を保全します

41 天然記念物であるアユモドキをはじめ多くの生物の生息環境の保全再生等を、市町や地域団体、住民等との協働により推進します。

42 芦生の原生林の植生を保全し、生物多様性に富んだ豊かな森林環境を維持できるよう、猟友会など地元関係者、京都大学、南丹市と連携し、食害の原因であるニホンジカの適正な数の捕獲を実施します。

43 森林所有者や地域住民、林業事業体、緑の少年団、企業、大学、府、市町等多様な主体が連携し、里山を中心に、「京都モデルフォレスト運動」を推進し、森の恵みを受けている府民みんなで京都丹波地域の森を守り育てます。

44 里山において、企業と連携し、放置竹林の整備を進めるとともに、伐採竹を資源として有効活用する新たな環境ビジネスモデルの構築に取り組めます。

45 府内産木材を活用した木材利用コンクール（もくもくコンクール）を実施するなど、将来を担う子どもたちを中心に広く木育を推進し、森林整備の必要性和木材利用の意義を発信します。

46 「森の京都」の豊かな自然を守り、持続可能な社会の創り手を育成するため、地元企業等と連携し、小学生を対象に自然環境やSDGsについて学ぶ体験型環境学習プログラムを推進するとともに、ICTを活用した体験型環境学習プログラムをさらに充実させます。

47 海洋ごみの原因となるプラスチックごみをはじめとしたごみの削減を図るため、市町と

連携し、代替プラスチック製品の利用や3Rの取組の普及・啓発を推進します。

4 京都丹波の強みを活かす「横断プロジェクト」

各行政分野ごとに記載している具体的な施策に、京都丹波の強みである「食」、「自然・歴史文化」、「スポーツ」という新たな視点から横串を入れ、地域課題を解決する新たな取組が生まれそうな施策を集めて次の(1)～(3)の3つの「横断プロジェクト」を設定しました。

この「プロジェクト」では、様々な分野の識者やNPO等地域活動団体に参画いただき、オール京都丹波で施策展開することにより、より効果的で広がりのある取組を行います。

(1) 京都丹波『食』プロジェクト

『食』は、人間の生命の維持に欠くことができないものであり、かつ、健康で充実した生活の基礎として重要なものです。

また、『食』には、人を惹きつける魅力があり、癒しを求めて農業や農村生活体験に参加する人も多くいます。

さらに、食育や地産地消を推進することにより、子ども達の健全な心と身体が培われるとともに、地域への愛着や誇りが高まり、豊かな人間性が育まれます。

このほか、様々な施策を『食』を切り口にして取り組むことで、より相乗効果が発揮されることが期待されます。

(交流・賑わいづくり)

- (1) 4 市町や地域団体などオール京都丹波で、食や文化、スポーツなど京都丹波の森の魅力を体感できるイベントを開催し、「森の京都・京都丹波」の魅力を広く発信します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』、『スポーツ』にも記載】
- (1) 6 京都丹波観光のモデルコースを紹介するプロモーション動画を作成し、京都スタジアムをはじめ8つの道の駅や観光施設等に「京都丹波PRコーナー」を設けて情報発信するとともに、「道の駅スタンプラリー」とも連携し、周遊・滞在型観光を推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』、『スポーツ』にも記載】
- (1) 8 京都丹波の生産者と有名ホテルの料理人によるグルメの集いなど、京都丹波地域ならではの食を味わいながら、その背景の歴史・文化・風土を含めて楽しむ「ガストロノミーツーリズム」の取組を推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』にも記載】
- (1) 9 里地・里山文化の発信拠点である京都丹波高原国定公園ビジターセンターや、芦生の森、美山かやぶきの里、映画ロケ地などの観光資源を活かし、森の京都DMOと連携して、食や森林浴、文化、スポーツ体験などを盛り込んだ新たな観光ルートの開発や着地型旅行商品の造成・販売、観光プロモーションを行います。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』、『スポーツ』にも記載】
- (1) 19 都市近郊でパラグライダーやラフティングなど数多くのアウトドアスポーツが楽しめる

京都丹波地域の特徴を活かし、スポーツ関係団体等で構成する「京都丹波・まるごとスタジアム化推進協議会」により、食や歴史文化等の地域資源を組み合わせた「スポーツ観光」を推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』、『スポーツ』にも記載】

(社会参加・健康長寿)

- (2)11 京都丹波地域の拠点である「きょうと農福連携センター中サテライト」が行う障害者と農家のマッチング、商品開発や販売ルート確保などに取り組みます。
また、京都丹波地域の事業所や行政等で構成される「京都丹波地域農福連携推進協議会」との協働により、障害者の就労支援を進め、収入の向上を図ります。
- (2)16 京都丹波の地場野菜やジビエ等を活用した食事の提供や、適切な量と質の食事を選択して摂取できる「けんこう食堂化プロジェクト」を推進し、企業や大学等に対して食を通じた健康づくりを進めます。
- (2)17 野菜たっぷり、介護予防、減塩に配慮した「なんたん・かんたん・やさい料理レシピ」を直売所で配布するとともに、ホームページにおいて普及啓発を行い、関係団体での採用を促進することにより、心疾患、腎疾患、糖尿病予防を進めます。

(移住・定住、子育て)

- (4) 3 既移住者の暮らしやノウハウ、地域の魅力などを伝えたり、京都丹波の自然を体感してもらうセミナーや相談会の開催等により、「森の京都・京都丹波ライフスタイル」を発信します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』にも記載】
- (4) 5 都市農村交流を通じて移住・定住を促進するため、森の京都DMOと連携し、教育体験旅行の推進に加え、インバウンドや京都市内からの周遊客をターゲットとした食や農作業体験のツアープランの開発を支援します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』にも記載】
- (4)11 農作業体験などの体験型食育や地元産食材を使用した学校給食における地産地消、望ましい食習慣の形成など、大学や企業等との連携により、子ども達が食の大切さや京都丹波の食文化を大切にする気持ちを育みます。

(安心・安全)

- (5)37 市町や有害鳥獣捕獲班員と連携し、ICT捕獲檻の導入などにより捕獲者負担の軽減を図り、集落も協力し捕獲水準を維持する地域ぐるみの捕獲に取り組みます。
また、猟友会等による食肉処理加工施設の整備計画を支援し、狩猟から捕獲、販売までの一貫した対策の取組を推進します。

(2) 京都丹波『自然・歴史文化』プロジェクト

『自然・歴史文化』は、人々に感動と希望をもたらし、豊かな人間性や創造性を育むものであり、また、地域への愛着と誇りを高め、人々の社会生活になくなくてはならないものです。

京都丹波の豊かな『自然』や伝統ある『歴史文化』は、周遊・滞在観光の対象となるとともに、移住・定住を希望する若者を惹きつける魅力になります。

また、次世代に引き継いでいくことにより、地域への理解を深め、若者の郷土愛を醸成していくことにもつながります。

さらに、京都丹波産商品を「京都丹波」の歴史や文化に結びつけてブランド化することにより、さらなる生産振興や誘客につなげていくことができます。

このように、様々な施策を『自然・歴史文化』を切り口にして取り組むことで、より相乗効果が発揮されることが期待されます。

(交流・賑わいづくり)

- (1) 4 市町や地域団体などオール京都丹波で、食や文化、スポーツなど京都丹波の森の魅力を体感できるイベントを開催し、「森の京都・京都丹波」の魅力を広く発信します。【横断プロジェクト『食』、『スポーツ』にも記載】
- (1) 6 京都丹波観光のモデルコースを紹介するプロモーション動画を作成し、京都スタジアムをはじめ8つの道の駅や観光施設等に「京都丹波PRコーナー」を設けて情報発信するとともに、「道の駅スタンプラリー」とも連携し、周遊・滞在型観光を推進します。【横断プロジェクト『食』、『スポーツ』にも記載】
- (1) 7 市町の資料館や博物館等と連携して郷土愛の醸成を図る企画展や常設展を通じ、住民自らの地域の魅力再発見を促します。
また、観光協会や商工会、森の京都DMO等と連携して、京都丹波地域全体を野外博物館と位置づけ、住民一人ひとりが地域学芸員・語り部になれるよう「森の京都」を学ぶ機会を設け、地域の豊かな自然・歴史文化を活かした交流拡大や地域振興を推進します。
- (1) 8 京都丹波の生産者と有名ホテルの料理人によるグルメの集いなど、京都丹波地域ならではの食を味わいながら、その背景の歴史・文化・風土を含めて楽しむ「ガストロノミーツーリズム」の取組を推進します。【横断プロジェクト『食』にも記載】
- (1) 9 里地・里山文化の発信拠点である京都丹波高原国定公園ビジターセンターや、芦生の森、美山かやぶきの里、映画ロケ地などの観光資源を活かし、森の京都DMOと連携して、食や森林浴、文化、スポーツ体験などを盛り込んだ新たな観光ルートの開発や着地型旅行商品の造成・販売、観光プロモーションを行います。【横断プロジェクト『食』、『スポーツ』にも記載】
- (1) 10 森の京都地域の歴史的魅力や文化・伝統を活かした地域づくりを一層推進するため、「都を支えた丹波・北山と保津川文化」をテーマに日本遺産の認定を目指します。
- (1) 14 NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放送を契機に、京都スタジアムに設置される大河ドラマ館などを活用し、市町と振興局からなる「京都丹波観光協議会」や旧丹波国を構成する京都府と兵庫県の7市町からなる「大丹波連携推進協議会」等と連携し、光秀ゆか

りの城めぐりなど、テーマ性を持った広域観光を推進します。【横断プロジェクト『スポーツ』にも記載】

- (1)19 都市近郊でパラグライダーやラフティングなど数多くのアウトドアスポーツが楽しめる京都丹波地域の特徴を活かし、スポーツ関係団体等で構成する「京都丹波・まるごとスタジアム化推進協議会」により、食や歴史文化等の地域資源を組み合わせた「スポーツ観光」を推進します。【横断プロジェクト『食』、『スポーツ』にも記載】

(健康長寿)

- (2)18 誰もが健康づくりに取り組めるよう「京都丹波の森のウォーキングコース」を充実させ、コースや交通手段等の情報をわかりやすく発信するとともに、市町が実施する周遊型ポイントラリーに組み込んで普及を図るなど、「森の京都」の豊かな自然や歴史文化を活かした健康づくりを推進します。

(産業・人づくり)

- (3)1 京都先端科学大学等の高等教育機関や企業との産学公連携により、国家戦略特区制度等を活用して規制緩和を進め、ドローンによる災害調査、測量などの研究開発・実証実験を支援します。

(移住・定住)

- (4)3 既移住者の暮らしやノウハウ、地域の魅力などを伝えたり、京都丹波の自然を体感してもらうセミナーや相談会の開催等により、「森の京都・京都丹波ライフスタイル」を発信します。【横断プロジェクト『食』にも記載】
- (4)5 都市農村交流を通じて移住・定住を促進するため、森の京都DMOと連携し、教育体験旅行の推進に加え、インバウンドや京都市内からの周遊客をターゲットとした食や農作業体験のツアープランの開発を支援します。【横断プロジェクト『食』にも記載】

(3) 京都丹波『スポーツ』プロジェクト

『スポーツ』は、世界共通の人類の文化であり、生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠なものです。

また、多くの参加者が集まる『スポーツ』大会の開催は、地域の賑わいづくりや活性化につながります。

「京都スタジアム」は、単にスポーツ施設としてだけでなく、周遊・滞在型観光の拠点として活用することが期待されます。

さらに、京都トレーニングセンターなど特色あるスポーツ施設を活用することにより、トップアスリートを育成するとともに、府民の体力づくりや健康増進にも活かすなど、様々な施策

を『スポーツ』を切り口にして取り組むことで、より相乗効果が発揮されることが期待されます。

(交流・賑わいづくり)

- (1) 4 市町や地域団体などオール京都丹波で、食や文化、スポーツなど京都丹波の森の魅力を体感できるイベントを開催し、「森の京都・京都丹波」の魅力を広く発信します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』にも記載】
- (1) 6 京都丹波観光のモデルコースを紹介するプロモーション動画を作成し、京都スタジアムをはじめ8つの道の駅や観光施設等に「京都丹波PRコーナー」を設けて情報発信するとともに、「道の駅スタンプラリー」とも連携し、周遊・滞在型観光を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』にも記載】
- (1) 9 里地・里山文化の発信拠点である京都丹波高原国定公園ビジターセンターや、芦生の森、美山かやぶきの里、映画ロケ地などの観光資源を活かし、森の京都DMOと連携して、食や森林浴、文化、スポーツ体験などを盛り込んだ新たな観光ルートの開発や着地型旅行商品の造成・販売、観光プロモーションを行います。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』にも記載】
- (1)13 京都スタジアムにVR・eスポーツの環境を整備し、新たなスポーツ体験を提供する他、バーチャルで京都丹波を旅するプロモーション動画を上映するなど、京都スタジアムを「森の京都・京都丹波」のゲートウェイとして、京都丹波地域全体への誘客を促進します。
- (1)14 NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放送を契機に、京都スタジアムに設置される大河ドラマ館などを活用し、市町と振興局からなる「京都丹波観光協議会」や旧丹波国を構成する京都府と兵庫県の7市町からなる「大丹波連携推進協議会」等と連携し、光秀ゆかりの城めぐりなど、テーマ性を持った広域観光を推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』にも記載】
- (1)15 京都スタジアムの集客機能を活かし、商店街の活性化や賑わいの街づくり等、亀岡市等と連携して、スタジアムを核としたまちづくりを推進します。
- (1)16 JR千代川駅付近に新たな観光拠点を整備のうえ、千代川から保津までの新たな川下りコースを開発し、スタジアムの集客につなげるとともに、観光客のさらなる周遊を促進します。
- (1)19 都市近郊でパラグライダーやラフティングなど数多くのアウトドアスポーツが楽しめる京都丹波地域の特徴を活かし、スポーツ関係団体等で構成する「京都丹波・まるごとスタジアム化推進協議会」により、食や歴史文化等の地域資源を組み合わせた「スポーツ観光」を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』にも記載】
- (1)21 「ワールドマスタースゲームズ2021関西」や「京都丹波トライアスロン大会 in 南丹」など世界規模のスポーツ大会の開催を捉え、商店街等と連携した地域の賑わい創出

や、国内外から集まる参加者に地域の魅力を体感できる滞在プランを提案し、京都丹波ファンを増やします。

(社会参加・健康長寿)

- (2) 4 ワールドマスタースゲームズ関西2021をはじめ、管内で開催される全国規模のスポーツ大会等のボランティアが、京都丹波地域の様々な地域活動に引き続き参画されるような仕組みづくりを進めます。
- (2) 15 京都スタジアムや丹波自然運動公園などを活用し、サッカー等の球技やクライミングを通じた健康づくりを進めます。また、京都トレーニングセンターが明治国際医療大学等と連携して、スポーツ医・科学や情報分析、栄養指導等の多角的な支援を充実させ、将来のトップアスリートを発掘・育成するとともに、ジュニア世代からの競技力を強化します。
- (2) 19 子どもから高齢者まで気軽に参加でき、継続的に様々なスポーツを楽しめる総合型地域スポーツクラブの取組を支援し、体力づくり・健康づくりを推進します。

5 エリア構想

新総合計画では、府内5つのエリアの主なハード整備を中心に、整備施設の特徴・効果を活かすソフト施策も含めて「エリア構想」として推進することとしており、地域の課題や特色を踏まえた対応方策を示す本地域振興計画と連動させることにより、地域の個性ある魅力づくりや更なる成長・発展へとつなげてまいります。

○京都スタジアムを中核とするスポーツ&ウェルネス構想

■京都スタジアムを核とした元気あふれる交流都市圏の形成

「京都スタジアム」の完成を契機に、大学や京都トレーニングセンター、府内スポーツ施設の連携を進め、丹波高原や桂川・由良川もフィールドとして活用しながら、内外から人が集まる日本有数のスポーツ・健康エリアとして、食やスポーツ科学と連携した地域づくりを進めます。

【主要な取組】

- トップアスリートの育成とスポーツのメッカづくり
- スポーツ、食や癒しによる健康づくりの先進モデル地域づくり

6 数値目標の候補

(1) 森の京都・京都丹波の地域資源を活かした交流・活力のまちづくり

※年または年度（以下同様）

指標の候補	単位	2018年（2017年）※	対応する具体方策
京都丹波地域の観光入込客数	千人	8,200	13～21
京都丹波地域の観光消費額	百万円	13,500	13～21
周遊・滞在型ツアーの参加人数	人	985	3 8～9 11
京都丹波に関わるSNS投稿数	件	1,300	5

(2) 人権が尊重され、希望を持って元気に活躍できる地域づくり

指標の候補	単位	2018年（2017年）	対応する具体方策
人権に関する啓発活動の取組回数	回	34	1
「チャレンジ・アグリ（障害者が農業を学ぶ講座）」認証者数	人	—	11
運動を主とする健康増進の取組への参加者数	人	3,000	18 20

(3) 明日の京都丹波産業を担う人づくり

指標の候補	単位	2018年（2017年）	対応する具体方策
新規の担い手育成数	人	56	2～3 14～19
管内製造品出荷額	億円	3,562	4～5
管内農畜産業出荷額	億円	153.7	7 9
管内産木材（素材）生産量	m ³	59,663	10～11

(4) オール京都丹波による移住・定住プロジェクトの推進

指標の候補	単位	2018年(2017年)	対応する具体方策
管内への移住者数	人	185	2~6
移住・定住応援企業数	社	—	1 8

(5) 交流と安心・安全の基盤づくり

指標の候補	単位	2018年(2017年)	対応する具体方策
河川整備計画策定済み河川の改修延長	km	3.9	14~18
対策を講じた防災重点ため池数	箇所	35	21
砂防・治山事業の整備箇所数	箇所	91	22~23
自主防災組織のタイムライン策定数	件	—	26